



~ 13
2898
11



宮田南北編演手集

近世新喜

雲乃昇間

雙

玉傳

第三集伍本

歌川國直子畫圖



仁德都書具

羣玉堂精刻

昭和四年

購本

欣幸

尾定

長喜門

釋

拾五冊之目

取易

雙玉傳三編竣切余一閱之曰寇

賊粹起世弁考國知切所

謂治不忠亂作者之深意不

觀矣抑發已之騷擾豈不

雙玉傳三編

門 八 13
號 2898
卷 11

殷鑒乎余知此書之有益於
世道與尋常一裨官小說不為
伍也若其智將勇士姓字某
續者亦規、實其生與微則
亦瘵人祝夢也要在不汲作者

之苦心焉耳

天保丁酉首春下泮播州三木
奎山下之安士得清堂主人書



雙正專第...亭

別所播磨守源長則朝

べつしよまろのまきみのも
とのあかのまへとん



榎並仲之進

えぎまのあかのしん

讚長則朝臣

八郡總兵東播雄遺
民千歳仰仁風一朝不
管誤姦賊日月政明懸
太空

孤堂

讚定範

空賊萬群如解瓦
冥年輔弼支高厦
能因形勢君雄杖
今日僧徒便牝馬
孤堂

とみ作額
うほへも
花とらけれ
志れをのど
空のえり雲と人や
とらえり
播磨 舟廻屋



淡河彈正定範

淳雲屋富作

奥三州守の御三将

三

賈民檜垣屋船十郎
 其渾家義婦鼓子おのゝかぜ

ちのゝある
 みさほひのや
 子ゆえの
 はるの
 幡木竹廻屋



讀仕寛

上河主殿佐実

誠忠世無倫
 勇武驚鬼神
 楠木乎堀血
 加藤合藤身
 一齋

櫻花上人 孤堂
 腥塵不魚杯 中酒
 清月未臨衣裏玉
 春山和尚 三齋
 詐言辨博不如無
 千象萬龍弄舌頭

春山和尚



櫻蒼上人

雙三

雙三

近世新話雲晴間雙玉傳第三輯惣目次

卷之一

廿一回 真觀音示現忠孝獲明王
廿二回 兩賊斬巽女名刀獲

卷之二

廿三回 大村嶺小太郎報父讐
廿四回 土寇大兵首聚夷成野

卷之三

廿五回 行龍大拳取天神山城
廿六回 土寇惡女富作忽滅

卷之四

廿七回 松露寺大行龍舌戰
廿八回 一陣破土寇總敗軍

卷之五

廿九回 淡河彈正天神山城責
卅回 妖賊富滅大團圓

通計十回集より至愛都三十回止

近世新話 雲晴間雙玉傳第三輯卷之壹

播陽 宮田南北編次

第廿一回 真觀音の示現忠孝名王と獲

却説名古小太郎ハ活觀音の長物語と始より聽居たり其
語所故實ふして且觀音の音聲容貌儂ふ似て儂ふあり怪き那
菩薩之髮頭の内より赫々と光り出する光明あり我妻時跡の
入那觀音ハ加持とあり登時遂と見えけられんと角郎兵衛ハ
向て云やう吾少の病氣あまふ跡ふ止り觀音さまの毫の加持と
願んと欲まて御身ハ是より響へる御内の御要と止准とまへと之

又五傳二編卷之二

角郎兵衛點頭て我毫急ぐ要ありて仲ふあつて歸り侍らるる
 分御速く歸らせまへと云のこゝつてわづらひるる憇りしやと内陣
 よりともや観音の御加持して追ふよび出ま名古小太郎忠孝も
 衆人ふ打連とも傍前近く出らる衆人の献ぐる錢まれば未まれ山
 よりの高くそら下ふ積上らる程あつて大勢ハ次第々々加
 持終り退歸る者多し今今帝小太郎們五六名おとあびる
 登官名古小太郎ハ菩薩ふ向て問るるやハ傍の具益大ふして感ずる
 所あまふあれども心得ぐとき一夏あつて傍ふ逆ら道あつねと首
 言とぐ一夏と鞠侍らん具徳が傳灯録に曰く周の昭王廿四年釈迦
 傍利利王の家ふ生じ大智光明と放て十方世界と照を誦金蓮花

自然捧双足分掌指天地作獅子吼声年十九欲出家号天人師住
 世四十九年將金縷僧伽黎衣傳衣与摩訶迦葉自一祖迦葉傳至
 三十二祖弘忍とりへり今も菩薩の光明と拜まつる傍傳灯
 録の世尊の光明と双とべ百が一も及ぶるす這世へ生まふ
 くる活傍の世尊す十方世界と照る大光明の有りのと
 ましてや西方浄土より人生ともうへむと塵の世へ顯るひ観菩
 薩の光明あつてハ光り薄し這義やいふと問わくは並居る
 人々大ふ愕き活菩薩と問答するハ何人あるやと小太郎が顔を
 見ざるハ一人もあつて跡ふひへ一奴隷力二も小太郎が袖とひき
 やよ待り侍る衛主平日ふ似げあつて人行状勿体あつても活傍ふ

いひて問捷支あらんや。かゝつて申罰と蒙るべし。益ある支あらず
あひそと引止るも主思ふ。カニ言を耳もつけむ。小太郎ハ毫も
擬議せず進み向ふと。かゝる控し。優婆塞の婆羅盡ハ色を棄て
大ふ怒り。小太郎が肩と引摺り。大胆ある莊俊うお勿体なくも
活佛ハ意外の問答何支あるや。圓頂錦衣の大和尚すら。恐て近づく
寄さるふ。和主がてと。癡者の傍の申す。小辺付ハ忽地罰と蒙るべ
し。控や退やと敦圀と。小太郎ハ心の内おます。似而者と察され
へ肩と摺し。優婆塞と傍へぞと投付くる。登音白面觀音ハ寛示
と微笑の聲と出。凡夫ハ其性儉ふして。傍の聖慮と察するもの
あつとも。我功德と謂ハ善人まれ悪人まれ。安養浄土へ救らん

と。示現と衆生ハ託し。這里ハ形とあらはせし。今壯俊
が云云と。故事ハよつて是非と論ど。吾まこと是と對手ハする。大傍
氣からふ似られども。迷悟のさハ説閑さん。傍の光と十方ハ顯や
いひ光ふあらず。只その功力の及ぶ所。是と照ふ擬し。るものあり。
辱も浄土の教主。阿弥陀覺王如來とや。諸傍ハすられて慈悲深か
す。因位のとこ。法藏比丘とあらはせし。四十八の願とて。吾と
たのまへ衆生ハ五逆十惡の者ありとも。我國へ迎へらるべし。と
迎ひ取すべ。我正覺と取まじや。誓言ハひし。仰言ハ法法衆生の光明
あり。知らずや釋尊出世の時。六惡人女人ありとつとも。是皆上根上
智あるべし。此の心素直ある故。往生ハ障の最々とてあり。今壯

又三傳一編卷之二

俊のこゝろあはるべ是當世の悪人あり。これ常言なり。公傳へ縁なき
 衆生へ渡しかつ。こゝろも吾の縁ありとも。渡せずとも。夏さうふ
 あし。汝等疑ふ夏勿しとれ。のゝかゝりて聖人の傍にあらずして外あり
 んや。昔呉の太宰伯嚭孔子を問ていへる夏あり。夫子の聖人の孔子答
 て宜く轉く識て強て記と聖人あり非ざるあり。伯嚭まゝ問て曰く
 三王の聖人歟。孔子答て宜く。三王へよく智勇を用ゆ。聖人ありあ
 ざるあり。伯嚭まゝ問て曰く。五帝の聖人う孔子答て宜く。五帝はよく
 仁信と用ゆ。聖人の丘が知所あり。伯嚭まゝ問て曰く。三皇の聖人
 歟。孔子答て宜く。三皇へよく時と用ゆ。聖人の丘が知所あり。伯嚭
 大に驚て曰く。然れば則孰歟。聖人とする乎。夫子答て改問あつて曰く。丘

聽西方の大聖人といふ者あり。不治して不乱不言して自信ト不
 化して自行る蕩々乎。と人の能名る所あり。是即傍あり。徐
 達衆生よく察して祈らば益々利益と与人疑ひ思ふ夏と。最
 徐あを示さるる。登時小太郎忠孝の毫も怯まず膝とす。め
 傍の利益へ有るれども即今功と拜せず。人へ信じがさるる所
 あり。吾の他国の漂客ありとも。原より一ツの望あり。今この願といふ
 傍の大慈大悲の力と以て得せしめさるるあり。何充王縉が跡
 とあり。寺と建るる身と尋る歎大悲の即恩の酬ひ侍らん。這義や
 つつと問かき。菩薩の笑つて宜ふや。その云々までの夏とせし
 願へ這首小娘得させん。とくく言と宜ふ小太郎近くす。人々

云やう某しが願といふに。往七月某の夜、女賊の為、棄ひ拿まへり。當時希代の明玉あり。菩薩の功力で、這玉を日あらず得せしむ。あふぞあふ小可が不勝のよろこび、命ふへく信心の真と盡して。謁仰せんと。いへば菩薩へ打りしひ、汝へ那明玉と、鞆得んこと漂客せし。汝今因果の理と説て、汝のこゝろふ説法せん。そむく那明玉は、こゝが以前の播磨の天神山、小住あせし。雌雄二の大蛇の玉あり。這玉一旦別所家の秘藏の東西とあり。それども人あつて是と棄へり。あつたあまごども、那玉へ別所家へいふおよぶ。萬衆の至尊とありし。秘して所持するその時、必ず子孫小崇あり。況や汝は、いふこゝ小臣の怠る玉と手小觸あべ立所、小禍あり。いふまごぞ知とぞ思へり。

や汝が父の十郎ハ君命あまごども、那玉と預り持し、其のふ自銀ふ伏するハ妙詮自證の玉の崇り。這理と察して、明玉の穿鞆ハ是より思ひ絶て、古郷小立入り。吾這示現と主あり。別所家へ傳達して、玉ハ穿鞆と為さる。ふ如く益あを纏とと教示す。菩薩の言ふ小太郎ハ、肚裏小慰みの案じ入る。あつてもあまご小太郎が母袖篠より、傳へ受くる。一寸八分の侍厨子、小入し観世音。此時首ふかけ居る。不測や一道の真光明赫々然と見輝き。那白面觀音の眼前へ貫く。輝くこれ白面觀音愕然とて、及さまふ違坐の上より、轉び落る。髪曲の裡より、こゝろと。まらび出する東西こそあり。是即活觀音の光明と思ゆる。光り輝く玉あり。



小太郎大およろこびす。日頃鞠大蛇の名玉這玉所持せし
 休こそ女盗賊異女あつんと云つて手早く那玉と遺ひあけつ
 立ち上る所と偽観音へ透間あけ飛かつて拿んとすると遠よ
 さぐりものし挑あふ小太郎ハ吐嗟とどろろ。後うち切かき
 偽観音も怯と去らず。身と飛巡らして戦へども身ふ寸鉄と帶
 されハ危の肩先切付らば兵兵と怯む所と小太郎獅子のそ
 とをかしたとかけて斬んとする。偽観音の姿ハ忽地消て跡
 あくかろふろ。小太郎ハ無念と思へど。明玉既ふ得く。上
 心の裡よろこび。那優婆塞と執人と。這里や那這と鞠れ共
 何處へ逃去らん。そが行衛の志まどろくれ。と這地の眼代

ふ訥へ原來角郎兵衛が家ふ引拿。霎時政理と待居。悠り
 あどふ眼代何某速ふ駈兵とけつろ。青蓮寺の僧徒們と一名
 もあまのさむと召捕來り。きびく鞠問くれ。寺僧等皆ヤクハ
 我寺中元よりさせる悪人あ。いつぞや猛可ふ本堂の觀世音
 失多ひ盜賊あどふ奪ひ去ふや。一山評議ふ及び。所ふ忽地一個
 の優婆塞來り。悠々とヤせ。山ふのありて見。果して
 一躰の觀音あり。白面やと活佛あり。皆々奇異の思ひとあ。
 それより信心の者追々出來て。悠の次第ふ及び。あり。是れ
 ふ存せ。夏一点もいとすと異口同音ふ。きびく眼代何某これ
 と聞て。汝等がヤ訊甚心得か。とて。ま。きびく鞠問

入心傳三編卷之一

いふ云々初ふかきねば首言要時へ吟味とさうかき殿兵と寮小四
 方へ出。隅あく鞠さうまれば一日一個の小倭羅と擒入り。這者々々
 賦う属下の小倭羅さく。川虫鮑太と喚做者あり。是ぞ珍義の手か
 であらんと云上まれば眼代何某即時小那。川虫鮑太と召出。まじ
 しく拷問あしなれば鮑太の苦痛堪えぬ首状してやや。上の御
 推察の通り小可へ那白面観音とあつて人と欺。岳曾古巽が属下
 の者あり。往頃都ふおひて我那巽が属下ふ属し。そが行李と荷ふ
 て江加まで来り。そこそ那鮑江濡九郎ふ出合。それより巽が計度
 しく、猶々地ふ青蓮寺の観世音と盜竊拿。巽自観音とあり。鮑
 江と優婆塞とあり。和漢の故實經卷の緯まで悉く教へる。

さてそれより巽女の首言鮑江ふつけ。青蓮寺の僧と欺きし
 が寺僧們皆幻術と知らず實の観音あり。そが思ひしふや大
 ふ尊信し。且多くの道俗と勸入。宝輦までかこのごとくみ拵へ
 たり。それよりして愚民と迷へ。金銀米錢と多く集めは合尤
 好う。しお忽小太郎とついで壯伎み見顯さまで。のこあつて。那
 明玉と人拿まき。巽の登時の手痕愉ど今ふおひく。尤の腕の人並
 ふ自由し。かこつて遺あく首状してまれば眼代何某とつて。聴
 そが白口書とつて。おまきつ再び青蓮寺僧們と召出。汝們が罪
 輕う。うざまきども。元より知であらる。度あまは罪一等と赦し得さ
 せん。以後悠る度あまを。心得るか。や付索解あつて。そへる。

引續て川虫蛇大と引出し罪の次第と付法場ふあひて死罪ふらる
あしころろ登後名古小太郎ハ當州の国の守ある今川殿より
召出されそが明智勇敢と賞美あつて種々の東西と賜ひたり。小
太郎ハ面目と身ふ施しよろこびしきりて角即兵衛父子の者
ふ可啼ふ休暇七し且国の守より下されまうし。賞錢のあ
はと分与へて。滞留の恩ふ酬ひ奴隷カニと引つきて播州さうさ
くへりきり

第廿二回

両賊と斬て異女名刀と獲る

名古小太郎忠考ハ帰るさふ浪花の母袖篠が墳墓小詣てつ花
ととて水と手むけ掌と合して可啼ふそが俗名戒名と數回云

あへど懐旧の涙とぐめぐめ。生くる人ふ言てく。母上喜あまら
べ。亡父が尊靈の引合しふふや。明玉既ふ鞠得たり。恁まは播
磨へめて入り。長則朝臣ふ献すべし。父と母の冠ありる。蒲上
大学連形と日あらず討取妄執の修羅の怨と報じ侍らん草場の
蔭より待せまくと涙と共ふ塵打たりひのそひで播磨へ立ち入り。那
明玉と恭々しくも国守別所播磨守長則朝臣へ奉る。長則朝
臣ハ扇ふ打乗し。左見右見まひ寛尔と笑う。小太郎ふ打向ひ。
出かきととと數回御賞美あつて。不題路次の夏ともと問せ
まへば小太郎ハ又もさうさる涙の海や山よりつり憂逆旅のつり
はをりし長物語と遺あぐり上りまへば長則朝臣ハ聽毎ふ頻ふ

嘆息なげきし、まひつ就中あつちゆう袖篠そでさやが横死よこじのよしと聞きまひ。小太郎こたろうふ打向うちむかひ。
汝なが孝かうやとて薄命うすめいある。雲う時ときの丹にふ父母ふぼと喪さうし、最便さいべんありん。
さまじくも明玉めいぎよ再予さいよふ入り、最さいめでとて。即時そとじふ小太郎こたろうと
父十郎ちちじろうが職やくふ任にんじ。一百貫ひやくくわんの録ろくと増賜ましまり、さまじくも。武門ぶもんの花
ひらけしとて。名古なふるがよろしく。大おほうとて。君恩きんおんと感かんじり。不
題てい那明玉なめいぎよの別べつ所家しよけより。朝廷てうていへ献けんじらまされ。至尊しそん甚愛じんあいさせ
あふとあへ。悠ゆうりし。やどふ小太郎こたろうの大学だいがくと討うて。父母ふぼの仇あひと報かへせん
と思おもへども。當時たうじ君家きんけの権臣けんしんやとて。此頃このころへ既すでふ天神山てんじんやまふまじり
く居城きやうじやうと構かまへつ。往々あつちゆう三木殿さんきぎのへ出仕しゅっしせらるふも。朋烈ともれつ卒そつ野のつま
これハ表向おもむきし。討取うちとべき。便宜べんぎとさるふ得えざるものうら。肚裡はらふ思おもふ

やう。某それ乙に既すでふ父ちちの遺言ゐがことふ。從したがひ明玉めいぎよと鞠得きよくて。君きみふ献けんせし。上うへうら。孤忠こちゆう
ハ這首このうたふ盡つくし得えたり。是これよりハ父母ふぼの寇あひと。思おもふ大学だいがく奴やつと猜あやしつて
討取うちとべし。是これハ不忠ふちゆうふ似にれども。又またのぞすべき者ものふあらず。敵討てきうちと得え
し。其跡そのあとでハ某それ乙にも切腹せつぷくとて。君きみへの言こと討うせらるふ如ごとく。それのさう
で大学だいがく奴やつハ刻詐こくせ諂曲てんきよくの者ものやとて。上うへの君きみと陥おとれ。下したの民たみと酷苛こくご
て。国家こくがの為ためふ禍わざはひあり。我身命わがみことと投なりつて。悠ゆうる者ものと討取うちとべし。不忠ふちゆうふ
似にて却かへて忠ちゆうあり。噫あ嘻あ悠ゆうあり。思おもふ案あんしつ。大学だいがくと討取うちとべき。準備ちゆうび
とさるるらう。話分わがこと兩頭りやうとう爰こゝふ。蛟倉せうそう紫むらさ。它また二ふた郎らう行龍ぎやうりゆうハ。往い日にち浪なみ華は
ふおひて。揖い立た郎らう七しち草そう們らと殺ころし。越前えちぜん越え波なの關せきハ。其頃そのころ。前まへ征せい夷い
今いま茲こゝ天文十九年てんぶんじゅうくわんねん。其その六む月げつの頃ころ。及および江え島しまふ出いり。其頃そのころ。前まへ征せい夷い

又三傳三編卷之二

の廿

將軍義晴
如意嶽の
城に居て
突の申ふ
高す病劇
驚と以て
膝つひ
赤た大
旋一位と贈
る云

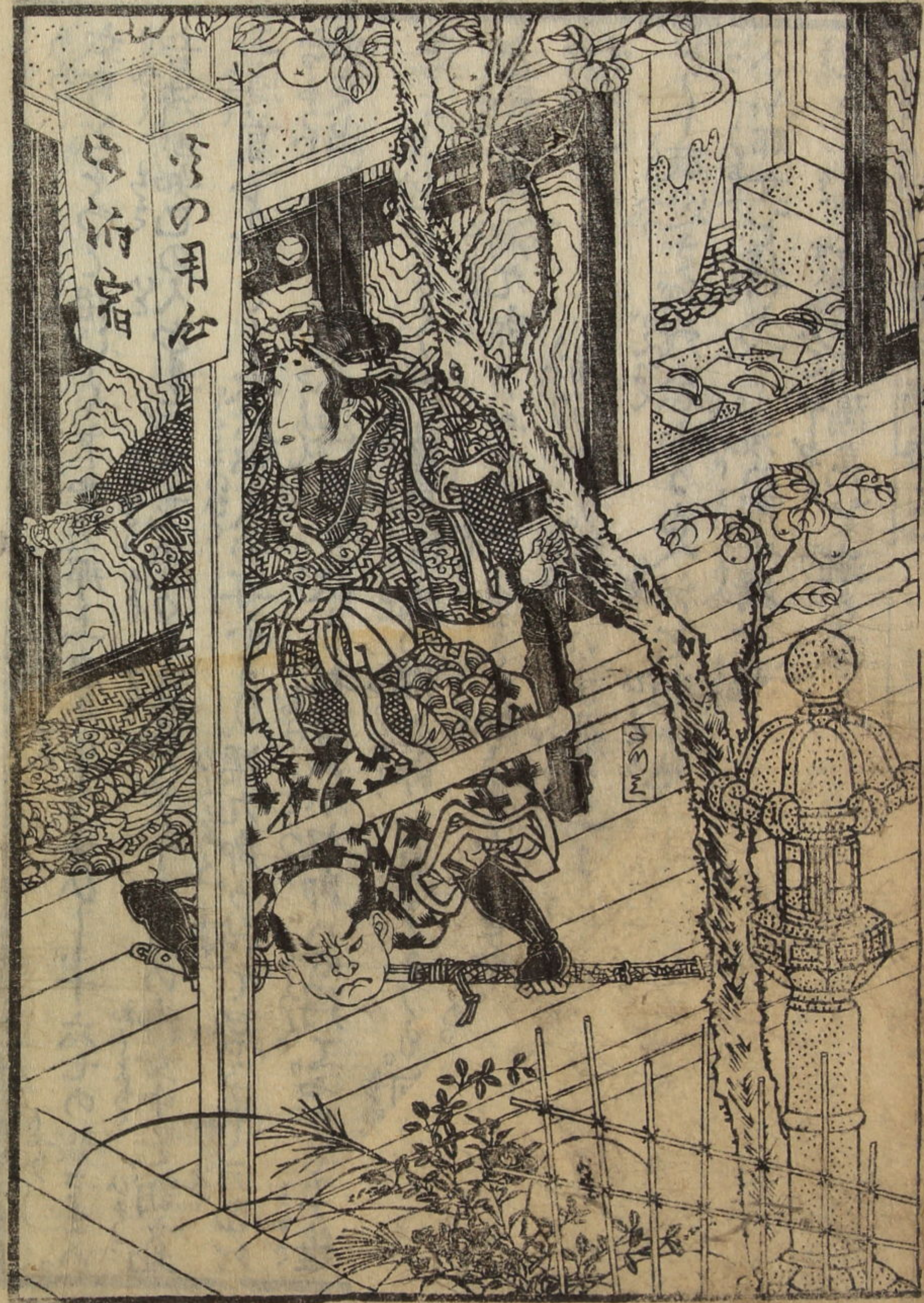
將軍大納言勇右大将義晴卿 年四十歳万 細川晴元等と相
 議し如意嶽の城に移んとて這首ふおひく覺せし。行竜大
 カとおく。猜よとく。一刀恨んと思ひし。果さるるこそ遺感
 あしとて。それより播磨清水ふ參籠せり。此時ハ早八月の末とて。
 禾粟梢登頃あり。這里止る。夏七八日。一日一個の男。一荷の行李と
 肩ふりけつ。這所へ參詣せり。行竜よく。是と見る。お。鯨江濡九
 郎あり。それば。兩人顔と見合して。大ふよろこび。絶て久しき夏共
 と物語りし。ころふ。濡九郎やころふ。巽さまハ嚮ふ。恁々の以所ふ
 て。那明玉と七びし。のころあつて。左の肩まで手と負りりとして。
 那白面觀音ふありし。夏より。小太郎と致し。播磨三木の仕度ふ

見頭され。明玉と取ま。夏其後手痲久しく。愉で。紀初新宮の盥
 湯ふあつ。療養せ。夏其後又分せて。ころゆへと。知ざる。夏迄
 遺もあ。語り。それば。行竜ハ是と。閔。那玉と。拿ま。と。最残念ふ
 思ひ。恁。恁。小僕羅來り。集り。數十名ふ。及ひ。あま。夏共
 宇薙ハいま。來ら。と。いふ。いふ。いふ。いふ。と。議し。ころころ
 濡九郎や。ころ。この。兩人ハ。ころ。ふ。路ふ。夏あり。て。登山。小。暇。あり。こ
 そ。の。あ。ら。人。君。ふ。小。僕。羅。と。將。て。當。山。の。丹。ふ。く。人。跡。絶。る。所。と
 あり。夏。時。待。て。居。る。ふ。べ。其。し。是。より。下。山。して。巽。さま。や。宇
 薙。們。が。行。齋。と。鞠。い。え。んと。い。へ。行。竜。点。頭。て。然。ら。ば。汝。山。と。下。り。巽
 們。と。迎。へ。來。る。べ。と。い。く。行。ね。と。行。竜。が。言。ふ。と。い。く。い。く。と。鯨

又三傳二編

江の姿と改めて逆旅人のぞく出立つ。清水寺と下りたり。此時八月廿四日。此日の雄林の墮下まで来りしが。日西山に傾きれば。や歌客を求めたり。這時隣の房の外。是も同じく逆旅人と見へく。三名四名の声聞ゆ。濡九郎いつくくと考へ見よ。聽覚ある声ありければ。と一やと思ひ隔亮の透より。遂と是と見よ。豈とらんや。一名の異一名の宇薙。一名の嚮。備前の岡山におひて。行李とらんらん。女盜賊。又一人のそのゆり。小所あり。濡九郎の且驚き。とらんこび。まづ飛入る。那女と引くへんと思ひ。かまど。今もやまつ。夏と仕損じ。那と取らば。後悔其處。小立ぐ。からんと思ひ。こまづ飛立胸と。稍や。まづち。思案。つとふ。ことあり。此家の小

奴即と。とつと招ひくや。那上座。居り多ひ。十六七の嬢さま。吾濟が知巳の人。おま。其尤の方。小座居る。三十五六の御女中。と消々地。小這首。よびて。只那人の耳。濡九郎が待て居る。云。あ。必定出て来るべ。心得る。飲と私言。小奴即へ心得て。や。宇薙とよび出。たり。宇薙早速出。濡九郎と見。何夏ありや。と鞆。濡九郎や。汝のま。ご知る。ま。ま。や。那女こそ。某。行。行李とらん。騙局あり。某。ひ。ま。飛。蒐。つ。捕。ん。と思。い。か。ま。ど。と。取。逃。さ。が。残。念。あ。る。ゆ。汝。と。消。々。地。お。よ。び。出。せ。り。我。不。意。小。飛。入。る。那。女。と。捕。ふ。べ。汝。の。那。小。所。と。執。へ。よ。心。得。る。飲。と。説。示。と。辭。の。裡。も。氣。の。堀。餘。江。隔。亮。と。蹴。と。あ。り。て。踊。り。入。つ。那。女。小。言。と。も。い。え



才飛かゝるを。垂氷の阿曼ハ濡九郎が顔見するよりも怖り。飛上り
 逝人とするとのぶき。濡九郎が挑戦ふそのひまふ小廝と
 見せらる九六郎垣と飛り。逝人とするを。宇薙へあつ飛菟り。
 せへへへ毫らむと。阿曼ハ怒と見るよりも。腰小帯
 せ。一刀とす。と抜て濡九郎小面も不振打て菟る。鯨江も毫
 も怯す。同じく刀と抜とあ。丁々ハ散と切む。奮激突戦劣
 らず勝も切立々々戦ひ。其旨も異女ハすつくと立て垂氷
 の阿曼が打らる刀小目とつけて瞬もせず打あが。アラ心得ぬ打
 あふ太刀音。鋒よりの陰々と秋の白雲。聲起り。金竜是が為ふ
 啼。天然の殺氣と起して。愁雨是が為ふ宜然と妙とあ。

干将小雲とく人莫耶の釵ふ雨とおふ白蛇斬む。漢祖起り。呉
 王わらびむ。眉間尺と素人。奇也々々と數回。感声雲時。止
 止ざらる。憊而二名の戦ひの時。止ざれば。巽ハあつと。あ
 かり。結あふる。阿曼が刀と。跡辺の如く。丁と執へ右の手
 みる。當る。灸所と。死活の。業さす。阿
 曼も。後へ。倒さ。巽ハ。手小刀と執あけ。
 見。鏑本より。鋒小至る。忽然として。唯龍頭。見
 異ハ。數回。豊城の氷。あ。呉宮の雪。仿佛。今
 知ら。手小入。奇々妙々。明玉ハ失ふ。れども。今

又玉傳三巻之一

這刀と得たりし上玉ふまゝなる室あり。吾雌蛇の再來あり。今
 まゝ雌竜丸の刀と得らん。因あり果ある兆あり。と不勝のうら
 こび大くあらぬ。透と見合し。件の阿曼後より遺する刀と拾ひ
 手たるく切つるを巽へひりうと身とかわし。新し得たりし
 名刀の斬味くちや巽が早業。阿曼が體へ真ニッふありて。と
 と倒しつる。宇薙もすぐふ。那組布し。丁百九六郎と起し。も立
 ち。おとつと首と打斬る。登山も濡九郎へ巽ふ向てやせり。
 頭領較倉行竜主久々清水寺の山奥に住ぐ。むと久君の來ら
 せり。と待支既ふ日久し。早く那里へ行かん。小可這般御迎ひ乃
 ち。ふ是まゝで出るあり。と。いへば巽へ點頭て。吾済も悠こそ思

いし。あまご。去向ふ何那と際どうして。と。うすも悠遅々し。と。
 さ。い。は。是。より。同伴せんとして。身ごころとあす。内ふ。這家の主が告
 訥。多人。這地の領主久米五郎一成ぬ。が。家練緝捕使とあり。夥れ
 夥兵と引率し。と。や。這所へ責來る。夥兵の頭人坂月魔破四郎
 速延真先ふ踊りつ。夥兵と下知して。巽們とのぶさ。と。もの
 取ま。と。と。巽は。是。と。こと。の。せ。す。四。方。ふ。あ。ら。う。て。投。立。る。と。鯨
 江宇薙と前後ふ。遂へ真。と。ら。う。ふ。切。て。出。し。ふ。魔。破。四。郎。ハ。怯。ま。の。す
 さ。と。す。味。方。と。ら。げ。ま。戦。つ。る。其。時。巽。ハ。す。と。と。と。と。例。の。奇
 術。と。む。す。び。な。れ。ば。忽。然。と。と。三。個。が。姿。は。う。き。消。じ。く。失。ふ。と。う。坂
 月魔破四郎大ふ。おとらき。那ハ尋常の人殺し。との。思。ひ。し。ふ。幻術と

又五傳三編卷之一

して逃去し、豫て噂ふ閑へする。岳曾古太平二が娘あり、巽と喚做女
 賊あり、开它二名はそが属下の盗賊あり、人ずらん、那們既ふ隠形
 の術もて這里と逃すれば、搦まるとして其甲斐あり、と思ひふれば
 鬨兵ふ下知して、垂氷の阿曼と九六郎が死屍と、かこのごとく収させ此
 よく久米五郎一成ぬし、へや上されば一成ぬし、よう使者とめて由
 と二本殿へ言上せしむ。余程ふ巽、鯨江宇羅の三名は逃形の術と
 りて、(す) 鬨兵の罟と切ぬけ、清水寺ふ馳上まて、行竜自小僕
 儼と率して出迎つ互ふ遅會の言と演、恙あそとよろこび、
 そが中ふ巽女ハ明玉と失ひしと。又雌龍丸の名刀と得し、
 ままで遺りあり、かろるれば、行竜又やや、我も嚮ふ雄竜丸の

名刀と得し、兵庫ふおひく、檜垣屋の楯五郎と喚做、との三
 千金ふ賣与し、が又とろろ守那們と殺せし、時子再吾手ふ入し、
 今既ふ和女郎あり、雌龍丸あり、吾あり、又雄竜丸あり、是因縁の自證
 あり、且又その雌竜丸の釘ハ、兵庫の楯五郎が周防よりかへり、け福
 原ふおひく組系とのふ女の騙局が奪取し、逃去し、思へばその組系
 ハ今般和女郎が殺し、垂氷の阿曼と喚做し、そのあり、それ
 等の更いさし、おきて、(す) 我們が豫て謀計、天神山の城と取て、
 播磨と切込、今天神山の城主ある、浦上大學と喚做、そのハ奸詐
 大慾の者やして、曾て民と憐む、更あり、今茲ハ夏のたぐり、
 雨の降と、未よく不登ふ、民を患ひ思ふ、
 浦上

領地へ他ふ越て凶年尤甚く。民も晨の食と失ひ困るを
さるものありふ大学ます。課役と強や。拿あぐる莫甚く
く。それのこあて此四下で福有の百姓ふまくの米と買籠
し。いさくさく米と焦するわらふ米穀のますく。き
ありれば踏頭ふ立く。食とんども与るもの一人もあく。軒ふ
のこんで餓と凄げど施さるもの最希あ入焦るもへる。今六十
余州。乱ま。一固も乱まざる地も。皆是五穀の價と高。一。饑
饑あふ。と饑饑ふ及ぶ。とめてあて時。其罪浦上とて
り。米と買籠。箕ふ歸す。今焦の。下。劣。上。と恨ぬ。の
へ。然。あ。ども。三木殿。歴代。の舊家。とて。君賢。とて。

臣忠あり。神吉ふ。民部あり。淡河ふ。彈正あり。雄野ふ。米有。
皆是三木殿の願股。と。今天下大乱。室町將軍の威名衰
へ。両上救。既。あ。ら。び。三好の一族。阿波。松永。幾内。南海。暴
と。行。小田。信長。の威。と。尾濃。の外。震。ひ。今。川。義。元。の。駿。遠。の。地。と
狗。武。田。信。玄。の。甲。信。の。間。起。り。氏。康。の。關。東。八。州。小。横。行。佐。竹。義
重。の。常。陸。ふ。あ。つ。く。岩。城。と。子。の。葦。名。盛。隆。會。津。と。領。長。尾。景
虎。の。越。後。ふ。起。り。屢。關。東。と。窺。ひ。朝。倉。義。景。の。越。前。と。守。り。畠。山。の
黨。の。河。内。能。登。の。兩。國。小。相。分。を。陶。全。姜。の。周。防。長。門。と。盜。有。り。毛
利。元。就。の。安。藝。小。堀。起。り。尼。子。晴。久。の。雲。州。伯。州。石。州。と。畧。大。友
宗。麟。の。豊。後。小。瀬。龍。造。寺。隆。信。の。肥。前。小。瀬。島。津。義。久。の。薩。摩。ふ。在

て、開元州の據郡の居るの勝て計ふつとまわし、修りなれども
三木殿の朝廷と重んずるひ將軍家と蔑ふせよ、国最静かきよ
似つれば是と成し易ふあり、幸來る九月十二日の夜、箱荷せし
喚做原あり、大味方と會集して、始て旗と北播ふあびりすべし
そし、三木の生氏子祭り、九月十三日と聞り、這日の浦上大學も
三木へ仕勤する夏あつべし、其虚かのつゝ、天神山と一挙ふ切取居城
とせ、尚この外、手配あまきとも、その箱荷野あり、百姓のりとも
大集會のあり、下知さへく、限あつ示し、関つて、それより、皆
我れ、清水山と下山して、霎時、けりて、かくし、る

近世 雲晴間雙玉傳第三輯卷之一終
新話

